

		1	2
		シーン1 彼女との会話	男の家・自室
		病んでしまった彼女	
			「たっだいまーっ」
			「やっぱり部屋だと落ち着くよね？」
			「……えっ？ うん。そりゃわたしの部屋じゃなくて君の部屋だけど……」
			「でもいいでしょ。幼馴染なんだし。それにわたしたち、付き合ってるから」
			「ちょっと。なんで赤くなってるの。付き合って半年だよ。……もう、やめてよ」
			「そーじゃなくてっ。その……意識されるとほら、わたしも意識しちゃうから……ね？」
			「わたしの顔が……赤い？ もう、そんなのいいの。怒るよ？」

「怒れないの分かってるって？ あーもう、うるさいなあっ」
「わたしにもそれぐらい分かってるよ！ だってしょうがないでしょ。……好きなんだもん」

「なんでにやにやしてるの！？ 笑ってないで何か言つてよもーっ！」

「……………好き、って……なんでそんなこと言うのかなあ、もう」

「やっ、どうしてわたしも言わなきゃいけないの？ そんなの改めて言うことじゃないでしょ」

「わあーかあーりーまあーしーたあーっ！ 言えばいいんでしょ、……別に恥ずかしくないもん」

「……急かさないでよ。言うよ、言うってば。だからちょっと静かにしててっ」

「……………好きだよ」

「あーもう、無理っ！ 恥ずかしいっ！ にやにや禁止っ！」

「ちよっと、なんでチャック開けてるの？ 今そんな話してな——しかも立ってるし……………」

「好きって言われて嬉しかった、って……だからってそこで普通出さないでしょ？」

「何をとって……わたしに言わせただけでしょ。ぜっ……たい言わないんだから」

「へ？ キスしてって……この状況でキスなの？……それおかしくない？」

「おかしくない？ って言っただけで別に深い意味はなくて……もうっ。分かったから。キスすればいいんでしょっ」

彼女がキス（5秒程）をする。

「……っ。これで満足した？」

「キスがエッチだった——って、勘違いだよ。ふっ—のキ・ス」

「えっと……。どーして無言でそんなところを指差してるのかな」

「分かるだろ？ って言われても……そりゃあ、分かるけど」

「はあ……。ほんとえっちだよね、君は。しょうがないなあ」
「はむっ……。んっ……。んん……。んっ……。ふふ。顔、えっち
になってるよ」

「もっと、って……。もう。急に甘えんぼさんだね」

「んーんっ。さっきまでわたしをからかったのにさ、君
も顔が赤くなってるからなんだかおかしくて」

「だから違うってばあつ。ばかにしてるんじゃない、か
わいいって思ったの」

「あのね、君はちょっと考えすぎ。男の子にだって可愛い
って言ってるんじゃない？」

「はいはい分かりました。——それで、次は何をすればい
いの？」

「どーせ君がキスだけで満足するなんて思っただけだよ。ほ
ら、次は？ 教えてくんないよ」

「……うん、よろしいっ。そうそう、やっぱり素直が一番。
それじゃあ、おちんちん……。舐めてあげるね？」

3

シーン2 フェラチオ

フェラチオを開始する。

「はむっ……んっ………んちゅ……っ」

「どーお？ 気持ちいいですかあ？」

「んふふ。顔、とってもえっちだよ？」

「んんっ……ん、君の顔を見てるとね、わたしも興奮して
きちゃう」

「じゅるっ、じゅるるる。あむ……んちゅ………んっ……」

「うっ……く、はむ……はむ………んふ」

「最初は柔らかかったのに……あーむっ……ちゅるちゅる
……じゅる……」

「今はすっごー……く、かたくなってるね」

「もーっ。ほんとに君はえっちだね。そう、君のお・ち・
ん・ち・ん・の・話」

「えっ……奥まで？ うーん………ちょっと怖いけど…

…君がそうしたいなら……………いいよ」

「はぶっ……………あぶ……………んっ……………んん……………っ……………ん

—っ」

「……………っげほっ！ う……………。やっぱりちょっと苦しい、
かも。わたし頑張るから、いつもと一緒でいい？」

「えへへ。ありがとっ」

「あーっんむ。はむ……………あぶっ……………んっ……………んん……………
っ……………」

「……………こーするの、好きだったよね」

「っちゅ。んちゅ……………っん。くちゅ、くちゅ……………あむっ。
んっ……………はむ……………くちゅ」

「変な臭いだけど……………わたしは君のおちんちんの臭い、
好きだよ」

「むーっ。変態じゃないよう。そんなこと言わないの。怒
っちゃうよ？」

「怒ってみろ……………って、本当にいいの？ わたしも怒ると
怖いんだよお？」

「あー、信じてないなあ。ほんとなんだから。でも、君は大好きだから……たぶん、怒らないよ」

「そんなことよりもっと舐めて、って。君は本当に自分勝手だなあ」

「しょーがないっ。……はむ。んっ………っ、あ……くちゅ……んん……っく………はふっ……あむ」

「んっ……はあ………んむ……じゅる……じゅるじゅるっ……ずっずっずっず」

「んふっ。そろそろ限界？ さっきから……あむっ……んっ、ふふ………おちんちん、ぴくぴくしてるよ」

「この前なんて一分も保たなかったよね。私がこう、はむっ……と啜えてすぐにびゅーって出ちゃったんだよね」

「今だってそう。ちょっと強くしたらそれだけで出ちゃいそうだよ？」

「堪えてみせる——って、ほんとにー？ そこまで言うなら………あむ。がんばってね」

「それじゃあ、今から一分以内に出たら君の負け。一分耐

えたら君の勝ち。いくよお」

「んっ……あむ、んっ……んん、ん……ずず、ずずずず。じゅる、じゅるじゅるじゅるじゅる」

「おちんちんがびくびくしてるよおー？ んふふふっ……んっ、あむ……んっぐ……んっ」

「ほーらやっぱりもう限界じゃない？ 無理しないで出しちゃった方が気持ちいいと思うんだけどなあーっ」

「んむっ……っ、んふ……じゅるじゅるじゅる、あーむっ。んっ……んっ……んんっ——！」

「んっ……んっぐ、んっ……。——っはあ、ふう………」

「もーっ、いきなりなんだもん。君ってば私が飲むまで頭を押さえつけちゃうしさ。ちよつと痛かったんだよ？」

「……まあ、反省してるなら……いいけど」

「でもね、勝負はわたしの勝ち。言い訳なんて聞きませんよーっだ」

「罰ゲームとかは決めてなかったから、今日はいいや。あ

	5	4
	彼女の家・キッチン	<p>シーン3 彼女の変化</p> <p>「っ、そうだった。まだおちんちん元気そうだけど、お・あ・ず・け」</p> <p>「っへへーん。私のお口に出した罪は重いのだっ！」</p> <p>「へっ？ 口調が変？ うーるさいなあーっ。ぜーんぶ君がいけないの。おっけー？」</p> <p>「うんっ。分かってくれたらそれでいいよっ。……今日はもう帰るね」</p> <p>「いやいやいやいやっ。君が嫌いになったんじゃないって、今日はわたしが夕飯作らないといけないからね」</p> <p>「そうそう、お母さんが忙しいの。それじゃあね、また明日。——ばいばいっ」</p>
	(……あつ。もう野菜が殆ど無いの忘れてた。わたし	

しっていつもこうなんだよなあ……)

(今から買いに行ってもあんまりいいのはないかも。
でも野菜が無い夕食って……嫌かも)

(そんなに遠くないからいいけど、また外に出なき
やいけないのかあ……やだなあ)

(あれ？ あの子確か隣の席の……って、なっ、
なんで家に入ってるの?!)

(……やだよ。さっきまであんなに仲良くして
たのに。わたしはずっと昔から好きなのに)

(なのにどーして。なんで。おかしいよ。ありえな
い、ありえないありえないありえないありえないっ
！)

(絶対に渡さない。わたしの好きな人だよ、わたし
を愛してるんだよ？ それなのに……)

(許さない。わたしから奪おうとするなんて絶対に
許さない。わたしを棄てようなんて、許さない……
……絶対に許さない)

6

男の家・玄関前

「ねっ、開けて」

「どうしたの——って、お話がしたいだけだよ。だからお部屋に入れて」

「今お客さんがいるから駄目？ ふうん、そうなんだ。そのお客さんって私より大事なんだ」

「だってそうでしょ？ わたしが君の為にまた来てあげたのに。君はそんな態度なんだもん」

「もう一度だけ言うね。二度目は無いから。あのね、お客さんには帰ってもらって？」

「どうして？ じゃないの。帰らせて、って言ってるの。二度目は無いって言ったよね」

「あそっか、わたしを怒らせたいんだ。なーんだ。それならそうと早く言ってよ」

「君がどうしても駄目だって言うんなら、わたしも遠慮し

7

ないよ?」

「……本当? 帰ってくれるって? そう。よかった。わたしも出来れば穏便に済ませたいから」

玄関から男と他の女が出てくる。

「何? あなたは黙ってくれる? 耳障りなの。変? 何が。早く帰って。あなたを見てるとイライラするの」

「いいから帰って。頭がおかしい? 馬鹿言わないで。おかしいのはあなたの方。さっさと帰りなさい」

他の女が走って帰る。

「やっと帰ったみたいね。それじゃあゆっくり話し合いましょう。家、上がらせてもらうから」

シーン4 彼女の疑問

8

男の家・自室

「——どういうこと？」

「君はわたしが好き？ 嫌い？ あんなことまでしたのに……本気じゃ無かったの？」

「言い訳なんて聞きたくない。あいつの名前なんて口にしないで欲しくない。なんで。どうして？」

「好きでも無い人とキスをするの？ 好きでも無い人とエッチするの？」

「わたしは君の彼女なんだよね？ 違うの？ わたしが勘違いしてただけ？」

「……………静かにしてよ。今わたしが聞いているの。大きな声出さないでよ、怖いよ……」

「正直に言って。わたしは君の何？ ただの幼馴染？ 本当の彼女はあいつなの？ ねえ……答えてよ！」

「何をしようと思ったの？ 二人きりでお話？ 違うよ

ね。子供じゃ無いんだもん」

「プリント？ 明日までの提出だから持ってきてくれた？
それがどうしてあいつなの？」

「学級委員だから？ 別にプリントぐらい委員じゃ無くても持ってこれると思うけど？」

「仲がいいから？ そう……。あいつと仲良いんだ。そんなこと初めて聞いたけど」

「言っていなかったから—— かあ。じゃあ聞くけど、どうして言わなかったの？」

「彼女に言わないなんて酷いと思わない？ 隠し事なんてしちゃダメだよ」

「本当に何もしてないの？ 証拠は？」

「一番大切なのはわたし？……………そんなの当然でしょ。でも、今の君は信用出来ない」

「どうやったら信用されるの—— って、簡単よ。体で確かめてあげる」

女が男のパンツを無理矢理下ろす。

「……あれ？ 立ってない」

「プリントを貰って少し話ただけ？ 嘘。信じられない。だって、だって——」

「……………そっか。分かった。やっぱりそうだ。君も結構ずるいよね」

「君、早漏だもんね。もう出しちゃったんでしょ。三分もあれば充分だもんねえ」

「やってない？ 信じてくれ？ だーかーらあ。どうやって信じて言うの？」

「ほーら。やっぱり証拠がないんじゃない。でも……そうね。最後のチャンスぐらいはあげる」

「ねえ、連続で何回したことあるの？」

「何の話？ って、君は本当に頭が悪いのね。オナニーに決まってるでしょ」

「それで、何回？ 五回？ 六回？」

9

「……………二回？ それ本気で言ってるの？」

「分かった。じゃあ、さっきフェラしてあげた分で一回。
あと二回射精してくれる？」

「三回は無理？ あっそう。……わたしのこと、やっぱり
嫌いなんだ」

「だってそうじゃない。わたしが好きなら一回増やすぐら
い出来るでしょ？ 違うの？」

「……まあ、わたしも鬼じゃ無いから。手伝ってあげる」

「でも君の好きなフェラチオも本番もだーめ。使ってあげ
るのは手と足だけよ」

「それじゃあそろそろ始めよっか。射精出来なかったらど
うなるか……覚悟しておいてね」

シーン5 手コキ

女が男の肉棒を握りしめる。

「……君のきったないおちんちんをごしごしごいてあげる」
「なあに？ まだ言い訳してるの？ 本当に何も無かった？ そんなことどうでもいいの」

女が肉棒をしごきはじめる。

「君がちゃんと射精出来たら信じてあげる。……出来なかつたら信じないだけよ」

「本当に何もしてないのかなあ？ おちんちんがゼーゼーん硬くならないんだけど」

「かわいい彼女が君の汚いおちんちんをしこしこしてあげてるんだよ？ どーして柔らかいのかなあ？」

「フェラして時間が経ってないから仕方ない？ そんなの言い訳にもなんないよ」

「せめて啜えてくれたら立つ？ わかった。じゃあ啜えてあげない」

「だってそうでしょ。フェラチオじゃなきゃ立たないなん

て意味が分からないもの」

「オカズもないとダメ？ どうして。さっきわたしがフエラしてあげた時はオカズなんてなかったじゃない」

「はあ？ わたしの顔がオカズだった？ じゃあ今もそうすればいいでしょ。ほら、わたしを見なさいよ」

「そうじゃない—— って、じゃあどういう意味よ。わ、わたしの顔がエッチじゃ無いからって……………」

「しょうがないわね。それなら胸ぐらいは許してあげる。たー・だー・し。触るだけよ」

「当たり前でしょ。胸を揉むなんて反則みたいなものよ」

「……………んー？ ようやく元気が出てきたみたいね」

「早漏の君がこんなに時間が掛かるなんて……………本当に何も無かったのか不安ね」

「……………さっきまで小さかったくせにもういつも通り？ そーんなにわたしのおっぱいが気持ちいいんでちゅか

あ？」

「今おちんちんが『びくっ』て動いた気がするんだけど、

「一体どうしてなのかなあ？」

「もしかして君はこーいうのに弱いのかなーあ？」

「そっかあ。知らなかったなあ、君が変態だったなんてねえ」

「えっ？ 違う？ じゃあ君のおちんちはどうしてぴくぴくしてるのかなー？」

「ほらまたっ。君はどうしようもない変態なんだね。ひよっとして君、Σなの？」

「……ふふ。そーなんだあ。Σなんだあ。Σのくせに無理矢理おちんちん舐めさせたんだ。ふゝん」

「ゆーっくり。ほら、しこしこしこ。ぴくぴく震えてるね。苦しいのかなあ？」

「でも、出させてあげないっ」

女が肉棒を強く握る。

「んうっ？ どうしたの急に。あ、痛かったの？ ごめんね、悪気は無いんだよ？」

「君のおちんちんがこのままだと射精しちやいそうだったから、ね」

「射精しなきゃいけないんじゃないのか——って？ うん、そうだよ。君は二回射精しなきゃダメ」

「それなら早く出させてくれ？ 君は変態なだけじゃなくてお馬鹿さんなんだね」

「いーい？ これはね、君が本当にあいつと何もしてないかの確認と、罰なの」

「君だってそうでしょ。すぐに射精しても反省しないんじゃない？」

「そーだ、いい案があるよ。君が誰ともエッチ出来ないようにする方法……思いついちゃった」

「気になるう？ 気になるよねえ。いいよ、教えてあげる。君のおちんちんを切っちゃうの」

「きつと凄く痛いと思うんだあ。ハサミをよく磨いで、根元から『チョキン！』って切っちゃうの」

「血もたくさん出るんじゃない？ 君は痛くて泣きながら

ね、わたしにごめんなさいって謝るの」

「出来心でした、もうしませんって血と涙を流しながら土下座するの」

「それは嫌だ？ ふうん。君に拒否権があるんだ。ぜーんぶ君が悪いのに？」

「違う？ 君は悪くないの？ そう。じゃあ悪いのは君のおちんちんだね。やっぱり切らなきや」

「信じてくれ？……っふふふ。ふふふふふふあはははははははははははははははッ！」

「冗談よ、冗談。わたしは君が大好きだし、君の臭くて汚いおちんちんもだーい好き」

「まさか本気にするなんて思わなかったの。……ふふ。でも、君が怖がってる顔は結構好みかも」

「あれっ。君って本当にもものすごくΣなの？ おちんちんの先から透明の汁が出てるよ」

「なーんだ。それならもっと続けてもよかったね。ぞくぞくしてたんでしょ？」

「――あ。忘れないでね。ハサミは嘘だけど、君をまだ信用してないのは本当だから」

「多分ないと思うけど、もしわたしが最後まで君を信用出来なかったから……その時は、知らない」

「じゃあ、君のおちんちんしごいてあげる。ゆっくりがいい？ それとも早い方がいい？」

「……そう。両方とも、ね。それじゃつ、最初はゆっくりね」

女が肉棒をしごきはじめる。

「ほーらっ。君の汚いおちんちんをしこしこしてるよ」

「ゆーっくり、しこしこしこ。おちんちは痛くないでちゅかー？」

「さっきまでおちんちんを切る話をしたのに、君のおちんちはもうがっちがちのびくびく」

「寒いんでちゅかあ？ それとも出そうなんでちゅかー？」

「……ふふふっ。やっぱり早漏の君には辛そうかも。早く

こすってあ・げ・る」

女が肉棒を強くしごきはじめる。

「しこしこしこしこしこしこしこしこし」

「ずーっとぴくぴくしてる。出したいのかなあ？　ねえ、君はどうしたい？」

「そーだよねえ、出したいよねえ。うん。じゃあ出してもいいよ」

「君が射精するまでずっとしこしこしてあげる」

「おちんちんをぎゅってして、しこしこしこしこし」

「ほらほら出していいよ、遠慮しないで。どぴゅーって出しちゃっていいよ？」

「あつ、おちんちんがビクビクしてる。ねえ、出るの？」

君のおちんちんから精液、出ちゃうの？」

「出して。いいよ、ほら、ねえっ出して。出して、出してえっ！」

10

男が射精する。

「っあはあ。精液どぴゅどぴゅーって出ちゃったね。すごい勢いだったよ」

「んーっ？ どうしたの。疲れた？ 二回目でもうへとへと？」

「休ませて欲しい？ それはだーめ。休んだらまた一回増やしてあげる」

「一回休憩したら、四回。二回休憩したら五回。君が辛くなるだけだと思うけどなあ」

「やっぱり今がいい？ そーだよねえ。よーしっ。じゃあ今度は足でしてあげるっ」

シーン6 彼女の下着

女がベッドの端に座る。

11

シーン7 足コキ

「フェラチオ、手コキ。それからあ、し、コ、キ。君は贅沢だよねえ」

「でも……やっぱり立ってないんだ？ ほんっとーにしようがないなあ」

「さっきは胸だったけど今度はそうもいかないし……」

「——って、急に『びくびく』っておちんちんが動いたけど……どうということ？」

「床に寝てるとスカートの中が見えて興奮する——って……」

「……はあ。男ってどうして下着に欲情するのかなあ」

「……まあ、わたしのパンツで興奮するならそれでいいか……」

「え？ さっきみたいに言葉責めして欲しい？……君はどこまで変態なの？」

「……またびくって動いた。この、へ、ん、た、い！」

「そこまで言うならわたしも遠慮しないから。君が後悔することになっても……知らない」

「聞いてもいいーい？ 君はわたしが好きなの？ わたしのパンツが好きなの？」

「どっちも——って、随分余裕ね。君のおちんちんが今どんな状況か分かってる？」

「そう。君のおちんちんは今わたしに踏まれてるの」

「まださっき出した精液が付いたままのきったな——いおちんちんが、私の足でごしごし擦られてるの」

「パンツ見ながら踏まれて気持ちいいなんてほんとーに気持ち悪い」

「こんなに変態なら五回ぐらい連続で射精も出来ちゃうんじゃない？」

「……あはは。それはきつい、か。でも分からないよねえ」
「ねっ、なぞなぞ出してあげる」

「ハサミが無くてもちよきちよき切れるものってなーんだ」
「わかる？ わからない？ わからないか。そーだよねえ。わからないよねえ」

「正解は、人の縁」

「わたし思ったの。君のおちんちんを切らなくてもね、君を惑わす人をどうにかしたらいんだ、って」

「あいつが君の家まで押しかけたのは同じクラスだったからだよな？」

「クラスが違ったら……ううん、学校が違ったらあいつは君の家まで来ないよね」

「わかる？ あいつがもし学校に来られなくなったら、君に迷惑が掛からないってこと」

「どうしたの？ また顔色悪くなってるよ」

「あ、もしかしてパンツが見えにくいとか？ ごめんごめん。よいしょっ、っと」

女が足を広げる。

「ほら、がばーって足広げちゃった。これでパンツも全部見えちゃったね」

「あれ。でもまだ顔色悪いかも。具合でも悪いの？」

「刺激が足りないのかな。えいつ、とりやつ、えーいつ」

肉棒を何度も踏みつける。

「どこ見てるの？ ちゃんとパンツを見て？」

「ほら、ぐにぐに。ぐにぐに。気持ちいい？ まだ刺激が足りない？」

「そ・れ・な・らあ、うりや。うりうり。君のかたーいおちんちんをぶみぶみしちゃうよーお」

「ほらほら、うりうりぐにぐに。パンツもよく見て。そりやつ」

「うーん。まだぴくぴくしないね。どうしたのかなあ」

「へっ？ さっきの話が気になる？」

「そっかあ。ねえね、君が気にしてるのは本当に話の内容だけ？」

「わたしよりもあいつが好きで、あいつのことが気になる

とか、そんなんじゃないよね」

「嫌だよ。わたし離さないよ。君はずっとわたしと一緒にいるの」

「わたし以外の誰かと仲良くなるなんて嫌。わたしと君は結ばれるべきだし、誰にも邪魔できないの」

「だから、だからね……君とあいつの話なんてしたくない」

女の足がとまる。

「ううん。あいつだけじゃない。君とわたしの話がしたい。わたしは君の話を。君はわたしの話をしたい」

「ねっ。そう思ってるよね。だってわたしがそう思ってるんだもん。君もそうだよ」

「あいつにはこんなこと出来ないよ。違う、させない。わたしは君をよく知ってるの」

「君が喜ぶ顔も、君が気持ちよさそうな顔も、声も、体も、何もかも……」

「だって愛してるんだもん。君のことだけをずっと近くで見てきたんだよ。」

「やだよ。やだやだやだやだ絶対やだ！ 君といたいよ……」

「どうして……どうしてあいつなの？ わたしじゃ……だめ？」

「わたしは絶対君のことを一生愛してる。だって君がいいんだもん。君しか……いないんだもん」

「……………」

「……えへへ。ごめんね、急に。おかしいのかも、わたし」

「変なこと言ってるかな。言ってるよね。もし……ね、君が嫌だったら、言ってる？」

「もうやめるから。一緒にいたくないなら、もう会わないから」

「……君が好きだけど、だから、君が嫌なことはしちゃうけないかな、って……思うの」

「……………えっ？」

「君も、わたしのことが……」

「それは……信じていいの？」

「……………ありがとう」

「でも、わたしどうやって君にお礼したらいいのかな」

「たくさん怖い思いさせちゃったよね。今だって、その…

…おちんちん、踏んじゃってるし」

「ふえっ?! 最後まで足でって……本当にそれでいいの?」

「ううんっ、君がそう言うなら……………わたし、がんばる」

「じゃあ、足コキ……続けるね」

女が両足で肉棒を挟んで足コキを再開する。

「……………えへへ。わたし、取り乱しちゃったのに元気だね」

「……………も、もうっ! 泣き顔がそそるってなによっ!

もう!」

「——あつ。ちょっとぴくぴくしてる。おちんちん大丈夫?」

「でも不思議だね。足でしこしこーってしてるだけで気持ちよくなるんでしょ?」

「痛くない? おちんちんからとろとろって垂れてるけど

……病気じゃないよね？」

「……カウパーって言うの？ 変な名前だね」

「あっ、おちんちんがもうビクビクしてる。もう出そう？」

「いつでもいいからね。その代わりちゃんと出してね。我慢なんてしないでいいよ」

「しこしこしこ、しこしこしこ。君のおちんちん、液でつやつやしててエッチだよ」

「ぜーんぶ出して。君の精液、空っぽになるまで出してっ」

「いいよ、出して。精液わたしにかけてっ」

「おちんちんからエッチなお汁、どぴゅどぴゅって出してえっ！」

男が射精し精液が女の顔にかかる。

「きゃっ！」

「……もう、かけてって言ったけど……顔まで飛ぶなんて……」

12

「ふふ。でも、もうだいぶ薄くなってるみたい」
「っん……ちゆるっ……っ、ゴクン」

シーン 8 彼女の愛情

「ごちそーさまっ」

「……疑ってごめんね。君が誰よりもいいひとだったこと、わたしは知ってたのにね」

「本当にごめんなさい。次また何かあったら、わたしは居なくなるから安心して」

「………何かあっても絶対離さない――。その言葉、ずっと信じてる」

「ありがとね。………わたしも君のこと、ずっと大好き」

「――いつまでも一緒だよ」

【了】